

## 小林隆児

● 愛着と養育のライフサイクル

# 障害をもつ子どもへのケア 母親へのケア

はじめに

今日、発達障害とされる子どもたちが増加の一途を辿っている。そこに共通するのは、対人関係の成立にかかわる問題を基盤にもつということである。このことが、彼らの養育にあたるわれわれにもこれまでにないようなさまざまな苦労をもたらしている大きな要因ともなっている。

今日、発達障害は中枢神経系の成熟と機能にかかわるならかの障害を基盤にもつとみなされ、発達障害にみられる多様な障害（症状）は、脳障害との関連で考えられることが多い。このような考えにもとづけば、障害は子ども固有の障害とみなされ、このような障害をもつ子

どもを育てる母親にどのような援助や支援の手を差し伸べたらよいかを考えていくことが本テーマに沿うことになるが、さほどこの問題は単純ではない。

なぜなら、発達障害とはもともとの中枢神経系の一次障害（impairment）が発達途上で出現するといった性質の障害ではない。発達障害とは「（精神）障害」ではなく、「（精神）発達」の障害」であって、その意味するところは、発達障害にみられる現在の症状（障害）は、決して子どもの内なる一次障害が発達途上で顕在化したものではなく、過去から現在に至る発達過程で形成されてきたものだということである。

発達（障害）とは、子ども（個体）の素質と

（養育）環境との対人交流の蓄積によつてもたらされるものであることを踏まえて、本テーマを考えていくことが肝要である。そうであるとするならば、子どもの障害と母親の養育の大変さを切り離して考えることはできない。ここに本テーマの微妙かつ重要な問題が潜んでいる。

ある印象的な事例から

強度行動障害を呈した自閉症青年A男とその家族への援助にかかわった時のことである。

あまりのすさまじい破壊的あるいは攻撃的行動ゆえに、家族はもろろんのこと、当時入所していた施設の職員も彼に翻弄されていた。筆者もA男を目の前にした時、恐怖の感情にしばしば襲われるほどであった。

母親はA男に対する長年の世話で疲れ果てていることが想像されたが、面接場面で表向きは気丈なところを見せていた。しかし、家に帰るとそれまでの緊張が緩み、ひどく落ち込むことが、面接の回を重ねるうちに、次第に語られるようになった。

そこで筆者は、少しでも心身の疲れを取り除くために薬を飲んでみてはどうかと提案した。母親同意のもと、早速、抗うつ剤と抗不安剤の服用が開始された。

数週間後、筆者の目には、それまでの母親の

緊張した構えが次第に薄れ、面接で互いの心理的距離が近づいてきたように思われた。筆者はそのような変化を肯定的に感じとっていたが、なぜか母親にはそのことが今までに経験したことのないころもとない感じを与えてしまったらしい。治療は中断を余儀なくされた。

A男の行動障害と母親の強い緊張した心的構えは、両者間で負の循環を生んでいることが筆者には容易に見てとれた。子どもに母親への関係欲求が高まると、母親の心的緊張は高まり、結果的に子どもの欲求を突き放すことになっていたのである。それが行動障害を誘発する大きな誘因となっていると判断したうえで治療の提案であった。

しかし結果的には、これまでの長年の心的緊張が急速に緩んでいったことが、母親には大きな不安を引き起こしたのではないかと推測された。障害をもつ子どもの母親へのケアの難しさを痛感するとともに、そのような母親の不安を十分に汲みとって対応できなかった筆者の未熟さを思い知らされる経験でもあった。

### 関係欲求をめぐる

### アンビバレンスと関係の悪循環

発達障害の中でもとりわけ対人関係に問題を抱えた子どもたちに共通して認められる心理的

特徴として、筆者は子どもの生来的な関係欲求をめぐるアンビバレンス（両価性）を重視している。

このアンビバレンスのために、養育者が直接かかわり合おうとすると、子どもに回避的行動が誘発され、逆に養育者が突き放すと、子どもに接近してかまってもらいたい欲求が高じてくる。こうして、子どもと養育者との間に悪循環が生まれ、両者の関係は容易に深まっていかなない。その結果、乳幼児期早期に成立するはずの愛着関係が育まれない。

子どもと養育者の間で生まれる基本的信頼感、養育者に対する子どもの気持ちのみならず、子どもに対する養育者の気持ちをも安定させるものである。基本的信頼感とは、子どもと養育者の双方で共有される揺るぎない肯定的な感情である。

逆に基本的信頼感が両者の間に生まれない時には、子どものみならず養育者も子どもに対して心底肯定的な感情を抱くことが困難になる。したがって、アンビバレンスの強い子どもとかわり合う養育者の思いには、子どもに対する複雑な感情が生まれやすくなる。

アンビバレンスの強い子どもたちとかわり合うと、われわれも関係の悪循環の渦の中に巻き込まれ、日頃は表に出ることのないような否定的感情が生じてくることも稀ではない。そこ

に本テーマの微妙で複雑な問題が潜んでいるのである。

### ある幼児例より

〔事例〕 B男、三歳六ヵ月、自閉症

〔知的発達水準〕 中等度遅滞

〔主訴〕 ことばの遅れ、ひとり遊び、視線回避

〔発達歴〕 胎生期はとくに問題はなかった。

満期正常分娩。生後一〇ヵ月、「パパ」「ママ」と発語。一歳で始歩。ことばの発達が遅れていた。

指差しは一歳前から見られたが、他の同年代の子どもに比べると非常に少なかった。この頃からクレヨン現象が認められ、現在まで続いている。一歳過ぎよりパズルやブロックで遊ぶことを好み、呼びかけに対しての反応は乏しかった。幼稚園へ入園するが、集団行動がとれず幼稚園側から退園を促された。退園後、親戚から自閉症ではないかと指摘され、受診となっている。

B男は、一時期育児不安が強まって里帰りした母親との間で、容易には関係が深まらない状態にあり、早速、母子ユニット（MIU）に導入した。

B男が少しずつMIUの雰囲気にも慣れて、自分の意思が行動にわかりやすく表れるように

なってきた頃のあるセッションでのエピソードである。

両親ともMIUに参加し、積極的な働きかけが目立っていた。マットにごろんと寝転がっているB男を見ると、母親は彼に逆立ちをさせようと働きかける。その時のB男は母親と一緒に楽しみたいという甘えたような仕草を見せていたが、母親は「ひとりでやっつけてらん」と自立を促す働きかけをする。そうかと思えば、子どもが一人で遊びたそうにしている時に、母親は過剰に接近して積極的に働きかけている。しかも、こんな時には日頃扱うことを禁じているような遊具をことさら勧めている。

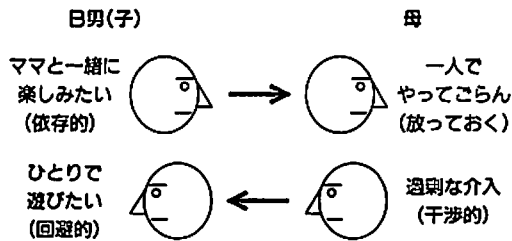


図1 母子のアンビバレンス(両価性)と関係の悪循環

B男の依存欲求が母親にわかりやすく表出されるようになったにもかかわらず、この時の母親はB男に自立を促す働きかけをしている。そうかと思ふと、B男がひとりになりたがっていると、母親は不安となり、自分のほうにB男を引き込もうとしていたのである(図一)。

### 母子双方の両義性と両価性

なぜ、母子間にこのような気持ちのずれが起こったのか、考えてみよう。

母親には、家庭の事情で親戚に預けられ、そこで幼児期を過ごしたという生活史があることがその後の面接の中で明らかになった。そのため、母親は幼児期から養育者に対する甘えをいつも抑えながら、懸命に生きてきたという。母親自身にも関係欲求をめぐるアンビバレンスが潜在的に強く働いていたのである。そして、そのことが現在のB男との関係において、前述のようなかたちで再現されていたと思われる。関係欲求をめぐるアンビバレンスの世代間伝達である。

人間は誰でも他者と繋がりたいという欲求(緊合希求性)とともに、自分らしく自己実現をはかりたいという欲求(自己実現欲求)をあわせもっている。人間存在の根源的な両義性である。

B男親子双方にもこのような両義的心性があることは当然である。本来であれば、子どもが甘えたい時に、母親はそれを受け止めるのであろうが、なぜかここではB男の関係欲求に対して、母親はB男に自立を促す働きかけをし、結果として子どもの関係欲求を突き放してしまっ

ている。さらに、B男が一人になりたい時に、母親は子どもとの繋がりを求めて懸命に働きかけている。

このような関係のねじれによって、本来両者の有する両義的な心性が、双方に関係欲求をめぐるアンビバレンスをもたらしつつもなっている。

ここでぜひとも強調しておかなければならないのは、このようなかかわりは、母親が意識的に行っているわけではなく、意識の介在しないところ(無意識の水準)で起こっているということである。母親みずからの関係欲求が抑圧され続けてきたために、子どもの関係欲求が思わず否定的に感じられ、結果的に子どもの自立を促すような働きかけが生まれたのではないかと思われるのである。

そこでこのような関係の悪循環を断ち切るために、筆者は、子どもの行動の背後にどのような気持ちがあるかを母親に丁寧に説明するようにここぞがけた。まもなく両親の焦燥感には薄らぎ、B男の甘えを母親はしっかり受け止めることができるようになっていった。こうして、母子双方の関係欲求は充足され、関係のねじれは修復の方向に進んだのである。

関係発達臨床で母子双方の愛着関係を育てていくと、子どもの基本的信頼感が生まれ、養育

者も子どもに対する肯定的感情が育まれ、養育者自身のアンビバレンスも緩和するとともに、「愛し—愛される」関係の中で癒されていく。しかし、愛着関係を育むための支援をしても、容易には関係が変容していかない事例も少なくない。そのような事例ではどのような問題が背景に潜んでいるかを次に考えてみよう。

### 抑うつ状態にある母親へのケア

〔事例〕 C男、一歳

〔知的発達水準〕 正常

〔主訴〕 泣いてばかりであやしても笑わない、抱きづらく抱くとのけぞる、視線が合わない、人見知り、激しく人を寄せつけない。

〔発達歴〕 仮死、吸引分娩。新生期、授乳中のけぞったり母の手をふりはらう、視線が合わないなど、母子間においてC男がしつとりと甘えるといった関係が乏しかった。C男はよく泣き、母乳を飲んだあとにも泣き続けることが多かった。あやしても笑わない、抱いてもすぐにのけぞるので母は疲れやすかった。

生後五カ月、指しゃぶりが始まる。指しゃぶりによって泣き叫ぶことが減った。C男は、抱かれることを嫌がり、のけぞってすぐにおりていた。そして、一人で横になって指しゃぶりをして寝てしまうことも少なくなかった。夜は三

〇分〜一時間おきに起きては激しく泣く。子どもが多い場所へ連れていくと嫌がって泣く。真似をまったくしようとしないう、人見知りが激しく、周囲への警戒心が強い。

初回面接で、母親は、「C男を赤ちゃんらしく感じたことがない」と語っている。

広汎性発達障碍のリスクをもつ子どもであったが、関係障碍として捉え、MIUに導入した。初診時に実施した新奇場面法(SSP)での特徴は次のとおりであった。

母は不安と緊張のためか、どこかぎこちない動きである。C男は他者を食い入るようにじつと見つめ、強い警戒的な構えを感じさせる。C男が何かで遊んでいても、他者の動きに注意が吸い寄せられるようにして他者を眼で追いかけてしまう。母はC男に挨拶を促したり、さかんに頭をなでて褒めたりしているが、周囲に対する強い気遣いがある。その一方でC男にボールが当たって痛そうに感じられるような場面で、母はC男を慰めるような行動をとらないし、C男も痛そうな反応は表立ってはしない。

分離不安が起きる状況になってもすぐに不安を示さず、ストレンジジャー(ST)に愛想笑いさえ浮かべる。しかし、まもなく不安が表出されるようになる。快、不快の情動反応は判然としない。抱っこに対してはアンビバレントで、

抱かれたそうにしているが、いざ抱っこされるとすぐにむずがっておろる。抱かれていても、左手の自分の指をしゃぶり、右手を母の胸の前に置いて身体的密着を避けている。母はボールや滑り台を見つけてはC男にさかんに声をかけて玩具を使った遊びに誘い込もうとする。

### 母子のかかわり合いから 見えてくるもの

SSPの観察で筆者に強く印象に残ったのは、母親がC男に再会した際に、さかんにC男の頭をなでていることであった。このような接し方は一見ほほえましいように感じられるが、その時の文脈からすると、筆者にはどこことなく違和感のある不自然な動きに感じられたのである。こころ細かったC男の気持ちを考えれば、しつかりと抱いてやるという行動が自然なように思われたが、なぜか母親はまるで何か良いことをした子どもを褒めるように何度も頭をなでてやっていたのである。

「頭をなでる、褒める」という行動は、子どもが社会的に好ましい行動をした際の親としての対応行動である。社会的意味合いの濃厚な行動である。それに比して、「抱っこしてあやす」という行動は、抱いてやることによって子どもが不快な情動を穏やかにしていくという養育者

の本能的なものである。

筆者は、ここでC男の母親の行動のみを取り上げてかかわり方の問題だと指摘しているのではない。つまり、この両者の関係では、中核に愛着形成の問題を抱え込んでいることと、母親のこのような行動とは密接な関係があると思われた、ということである。

愛着形成は母子双方の密着した関係をもたらす、そこに本能的な行動が誘発されるといふ側面があるが、愛着形成が困難な母子にあつては、どうしても距離をもったかかわり合いに終始しがちになる。つまり、对人的距離が遠くなればなるほど、互いの気持ちを通い合う関係は生まれにくく、逆に子どもの行動を観察するという構えをとりやすくなっていく。このような要因と母親の子どもを褒めるという何気ない行動とが、どこかでつながっているのではないかと感じられたのである。

子どもの気持ち(情動)を感じとることが難しく、子どもを行動次元で見て対応するというかかわりは、母親が毎日記載している日記の中での子どもに関する記述に濃厚に反映していた。行動次元の表現が多く、子どもの気持ちを感じとることがこの時の母親には難しかったのである。

関係発達支援が進むにつれ、次第に母親の幼児期における被養育体験が深くかかわっている

ことがわかってきた。つまり、幼児期にこころ細い状況に置かれても、ひとり我慢してじっと耐えてきたという幼児期が想起されるとともに、実母の期待に添えて懸命に努力してきたということがある。さらに改めて丁寧に出産前後からの様子を聞きとつていくと、産後に抑うつ状態となり、現在もいまだ充分に軽快していないことも明らかになってきた。母親はつねに子どもの行動が改善しないことを嘆いていたが、その背景には母親の抑うつが深く関係していることもわかったのである。まもなく、母親に抗うつ剤の服用を勧め、薬物療法が開始された。

その後、筆者には母親の抑うつ状態はかなり改善したように見えたが、どうしても世間の目を気にするあまり、子どもの行動を否定的に捉えがちであった。母子の愛着関係が修復されるまでには、かなりの期間の母親面接が必要であった。

おわりに

昨今の発達障害ブームは、発達障害イコール脳障害のパラダイムと重なり合っているため、発達障害の理解にあたって障害が一生運持統するという定説が一般化し、根治療法ではなく、ハビリテーション的発想のもとに障害特性に応じた援助の必要性が叫ばれている。

冒頭に述べたように、発達障害がなぜ「発達

障害」なのか、を考えた時、発達本来の道筋に沿った援助がわれわれには今求められている。そこでは、土台が育ち、その上に新たな経験が積み重ねられていくという本来の発達の流れが発達障害では阻害されているということを問題の中心に据える必要がある。

このように考えていくと、発達障害をもつ子どもの発達支援は、養育者とのかかわり合いを支援するという視点を抜きに考えることはできない。養育者の育児負担感を軽減するための援助の必要性は言わずもがなではあるが、それは決して子どもとの関係を切り離すかたちで進められるべきではない。両者の関係を支援することが一時的には養育者に大きな心理的負担をもたらすことがあつたとしても、<sup>(1)</sup>長期的視野に立つた時、このような支援なしに両者の関係が本来の発達の道筋に沿って深まっていくことは困難である。発達障害に対する支援は、あくまで関係発達支援であることを忘れてはならない。

(文獻)

(1) 小林隆児、勝又基与英「関係発達臨床の立場からある高機能自閉症の子をもつ母親の手記より」『そだちの科学』七号、三〇一四二頁、二〇〇六年

(2) 鯉阿峻「両義性の発達心理学—養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション—」ミネルヴァ書房、一九九八年

(こぼやし・りゅうじ／児童精神医学)